



学生時代からの友人で、今に続く付き合いなのが同志社大学合気道部の仲間だ。合気道は大学入学後に初心者として始め、2段ま

同志社大学

明光電子社長

そがわ まさあき
十川 正明氏 (64)



で取った。入学した1967年(昭42)は学生運動が盛んだったが参加はせず、だからといって勉強する気はさらさらない。部の連中とよく体を鍛え、よく遊んだ。体育会だけに練習は厳しかった。当時は京都市内の



3年生の時、アルバイトで時代祭に出演した(中央列の中央が十川社長) ▲……………

の役を取り、後輩には足軽役を押しつけた。でも、いざやってみるとよろいかぶとは想像以上に重い。足軽はさすがに身軽で、後輩は何食わぬ顔をしている。バイト代に全然見合わないなと思っても後の祭り。当時から「しんどい、しんどい」が口癖で、家業の酒卸業を継いだ今も同じことを言っている主将の大亀満照君(大亀商店)や副将の磯田茂樹君(元タツタ電線)らが大事な仲間。寺脇晴夫君(元村田製作所)は故人だが、残った者は2、3年に1回は集まる。顔を合わせれば当時のように酒を飲み、当時と同じ時間が流れる。(横浜市港北区新横浜3の18の9)

寺を借りて練習場としていた。練習を終えたら南禅寺や知恩院といった名利、京都御所を回って大学に戻るのが決まったコース。雪の降る日だろうが砂利道だろうが、すべてはだしで走る。痛くてしんどくて仕方

南禅寺は紅葉の名所であ

その境内を走っていたというのだ。体を鍛えるのに一生懸命で、目に入らなかった。京都三大祭の一つ「時代祭」にアルバイトで出場したのもよく覚えている。よろいかぶとを着ようと武将

業した山本駿一昭和鉄工社長を予定しています)

雪も砂利もはだしで鍛える